

## 一 技術者の歴史観一

宇 井 純

仕事柄、公害について書かれた論文をたくさん読むことがある。終りまで読むに値するかどうかの判断のために、私は二つの基準をおくことにしていた。一つは、歴史的な考察があるか否かであり、もう一つは、現実の公害の激化に対して、科学者としての反省の表明があるか否かであった。この二つの基準はほとんど外れたことがなかった。基準を満たしている論文は、終りまで読んで何か教えられるところがあり、それがない論文は、読んでも時間の無駄であった。第二の基準は内容的にも説明がつかぬのだが、歴史考察の有無はあくまで経験的なものであって、私にも長い間それがなぜ基準として有効なのかは、説明できなかった。

1979年だったか、メキシコから来た哲学者、イバン・イリイチの講演を聞きに行くと、彼が権力の平和と民衆の平和、パクス・ロマーナとヘブライ語のシャロームの区別を話していた時、支配者の平和論は Ahistorical である、非歴史的である。と語ったのを聞いた。なるほど、平和学の方でもそういう体験があったのか、私が読んだ公害の論文でも、非歴史的なものは、たいがい支配者の側の立場に立って書かれたものであった。支配権力は、その時だけの権力維持しか考えないのである。

1960年代前半、水俣病の原因はもみ消されて世間から忘れ去られた。その時期に水俣病を調べることは、何とも心が痛む作業であり、しばしば投げ出しなくなった。そのつらさを忘れるために、私は戦前の公害の歴史を調べる仕事を並行してはじめた。おどろいたことには、明治期を代表した公害である足尾銅毒事件の敗北ののちに、大正期には被害者の運動が一定の成功をおさめた時期があったのであった。この伝統を破壊したのは第二次大戦であり、その後遺症は高度成長になってからもつづいて、水俣病の悲劇につながっていた。そのころは、公害の歴史に学ぶべきものがあつたにもかかわらず、戦前はすべて暗

黒として、浅薄なマルクス主義史観が横行し、何が大正期から昭和初期にかけて起ったのか、運動の成功をもたらした要因は何かというような事実を見ようとする考え方がなかった。中央政府の政権を握れば、すべての問題が解決するような幻想が、学者の間にも横行していたのであった。戦後、民衆運動史の分野で、戦前の歴史の経視のために損失した時間は、おそらく十数年に上ったであろう。公害反対運動で言えば、ようやく歴史から学ぶことの重要性に運動が気づいたのは、1960年代も半ばになってからのことだった。この間に水俣病をはじめとするたくさんの公害が、取り返しのつかないまでに進行し、激化したのである。

そして、歴史の意味するところを正しく理解し、それを今日の局面に生かすためには、なおしばらくの時間を要した。その一例が、明治期の代表的な公害、足尾鉍毒事件で、農民の中心にあってたかかった田中正造の、特に晩年の行動の意味であった。政治の第一線から退き、谷中村の強制収用に追立てられ、北関東の山野を放浪する如き旅のうちに彼はその生を終るのであるが、彼はその旅の目的について多くを語らなかったために、宗教的な境地に達したのでであろうと解釈された。明治天皇への直訴もまた、家父長的な農民指導者の思いつめた行動とされ、いずれにせよ田中正造の思想は古風な国家主義者であると長く考えられて来た。この晩年の旅が、利根川水系の治水理論の基礎データを集めるためのものであり、正造には時代をはかるに先んじたエコロジーの思想があったことが、英国人の研究者によって指摘され、私たち後輩に気づかれたのは、1970年代も末になってのことである。今日あらためて、彼の思想と実践の意味について、そこに貴重な価値があることを教えられたのであった。歴史に学ぶ姿勢が生れて、事実が集められ、再構築され、それから意味が把握されるまでには、一定の順序と時間が必要なのであった。

こういう苦い体験を経て、私たちはようやく今日に到って、地域の歴史的条件にもとづいた固有の世界観と理論の必要性に気づいた。もちろんそこにおいて、過去の理論の成果は最大限に生かされなければならぬ。戦後のマルクス主義理論も、階級と収奪関係の現実を洗い出すためには有効なものであった。その有効性を否定することは誤りであろう。しかし一方で、外来の理論ですべて

を説明できると考えたことも無理であった。私たちは時間を空費しただけでなく、多くの無告の人命を失なったのである。

しかしまた、一介の技術者であり、むしろ病気の大流行に直面した救済者のような立場におかれた私にとって、固有の世界観と理論を作るのは容易なことではない。時間、空間をこえて正しく現実に対応できる理論をもつことは、私には不可能であろう。だが私が住むここ沖縄、あるいは日本の現実、何等かの行動をとることを私に迫っている。目の前の病人に一時しのぎの痛み止めしかないにしても、ともかく処置をしなければならないのである。患者を救う名医になりたいが、とても私にはその力がないこともわかっている。ここでは、ただひたすらその場しのぎの処置をして、患者に備わっているはずの、自然治癒力を信ずるしかない。私が持ち合せている理論というものは、せいぜい目前の問題に直面して、あまり大きな誤りなくとりあえずの処置ができる程度の、ごく初歩的な、そして経験的なものである。沖縄で言えば、応急処置ができる、かけ出しの医介輔のようなもので、とても臓器移植などができる立場でない。しかしそれでも、ないよりはましなのである。そして今沖縄に必要なのは、まさに応急処置である。

幸いなことに、私は技術者として育ち、しかも仕事の分野が、競争のはげしい先端技術ではなくて、地味で人のいやがる汚れ仕事である故に、競争に気を使う必要がない。また先端理論と付き合いなくても、大まかな、初歩の、おおよそ理論と言えないほどの方針でも十分役に立つところで仕事をしている。これは後進分野のありがたさである。そして私のところへ来る患者は、手おくれにならなければ自然治癒力を持っているし、私に心臓移植を求めることはない。私がお手上げのとき皆が懇念して成仏してくれたかどうかはわからないが、少なくとも私が最善を尽そうとしたことは納得してくれた。いわばスラムの医介輔である。そしてたくさん場数を踏めば、それなりに経験が積み重なって来る。水をきれいにするというのを医療にたとえれば、最低の薬代でもどうにか治せる位の腕は身についた。あとは安静と栄養で、体力がついたら誰か他の名医に手術をしてもらおう場合もあるかもしれない。あるいは簡単な予防手段で、食事の前に手を洗うこと、あるいは生水をわかつて飲むことぐらいでも、流行病

に対してはかなりの有効であることを知っている。

歴史性を重視するということは、いわばその程度の常識なのかもしれない。しかしその常識が、しばしば忘れられたことも事実である。私の仕事である下水道の分野で、ごく最近体験した苦い記憶の例を、ここで一つあげておこう。下水道の仕事に、応用化学というちがった分野から入って来た私が、もう二十年以上前に、おかしいと気づいたのは、工場排水と家庭下水の混合処理であった。下水処理場で微生物によって分解、浄化される家庭下水とちがって、工場排水には、種々雑多な生物では分解できない毒物も入っている。これを混ぜることによって、どんな方法でも浄化できない厄介な混合物ができてしまう。その不合理を説明し、なぜそうなっているのかを先輩や同僚に聞いても、昔から欧米でそうしているから、日本でもそう決めたのだという答しか返って来なかった。かえてこの不合理を指摘し、改善を求める私は、下水道の分野では異端視された。

その理由に気がついたのは、ほんの数年前である。要するに簡単な歴史の問題であった。欧米では、まず都市の中から汚水を排除するために下水管を埋めて下水道を作った。そしてそのあとに、放流先の河川が汚れて困ったので、処理場をあとからつけたのである。従って処理場が出来る前から流入していた工場排水が処理に不相当でも、それに処理場から文句をつけるわけには行かなかった。ところが日本では、新しく計画を作るのであるから、計画の段階で処理できないものは除外することが出来るし、そうすべきところであった。そこに気づかず、欧米の先行例を形だけ真似してしまったのが、日本の下水道界の失敗であり、私の疑問点もそこにあったのである。岡目八目というが、私はこの分野で外来者であったために、既存のものにとらわれずにその矛盾を発見することが出来たのであった。おそらく日本から欧米先進地の下水道を視察するために外遊した技術者、政治家の数は何万人であったろう。その中に、下水道の歴史的な条件の日本とのちがいに気づく人間が全く居なかったことは、おどろくべきことであるが、これが日本の現実なのである。これまでに建設された下水道のシステムをあるべき形に改造するためには、おそらく数十兆円を要するであろうし、それだけの金をかけて改造すべき理由があるかどうかとも疑がわし

い。要するに、馬鹿なことをやってしまったというに尽きる。

技術の世界では、このような失敗はあちこちにあるのだが、専門家社会の厚い壁にかくされて、外からは見えないようになっていることが多い。原子力産業などもその例で、百年あとからふりかえると、子孫に始末できない廃棄物を押しつけて、取りかえしのつかない汚染をひろげる愚行とされるだろう。渦中に居る者は、目先の利害にとらわれて、全体は見えにくい。かえって素人の素朴な質問の方が、核心をつきやすいのである。

ついでに言えば、全体像を見るための歴史的感覚の必要性和、学校教育で日本史を必修にすることの間には、関連は全くない。王侯将相を中心とした、日本国至上主義の日本史によって、歴史的感覚が養われるのではない。かえって民族的独善と、他民族への差別を生み、国を誤るものになりかねない。大体今学校で教えている官許の歴史とは、科学的な歴史の名に値しないものなのである。今我々に必要なものは、現在を相対的に見る感覚である。そして日本をアジアの中の一つとして、周辺とのつながりでとらえる立場である。

もう一つつけ加えれば、小さな動き、遠くのニュースにも、鋭い感受性をはたかせ、自分のことにひきつけて考える立場こそ、今求められている。それは夜郎自大、自民族優先主義をめざす、文部省官許歴史学とは対極にある。たとえばオスマントルコの、1565年のマルタ攻囲戦のニュースは、ヨーロッパの死活を別けた大事件として、琉球王朝にも間もなく伝わったはずである。その一つの証拠は、1609年の島津の琉球入りの時に、那覇港の入口に鉄鎖が張られていて島津軍の上陸ができなかったと伝えられているが、これは正に老将ラ・ヴェレッタの命令下、マルタ騎士団がトルコの船団に対して試みて成功した戦術であった。惜しむらくは、マルタの攻囲戦の経験も、大和から洩れ聞えて来る情報も、当時の琉球王朝の注意をひかなかったことであった。もし琉球側に十分な備えがあれば、島津三千の兵のほとんどは生きて帰れなかったであろう。マルタの場合には、攻めたトルコ軍は四万人、守る騎士団は九千人、そして百余日の攻囲戦ののち、トルコ軍は一万人が敗走し、マルタ側は二千人が生き残ったという、おそろべき消耗戦であったが、この戦でキリスト教世界が救われたのであった。この体験からも、情報の大切さは明らかであろう。

現在、沖縄がおかれているのは、16世紀のマルタと同じようなダイナミックな状況である。しかし沖縄が今求めている情報は、圧倒的に北側の日本から流れて来るものが多い。他をかえり見るまでもなく、大学で教育、研究にたずさわる教員を例にとってみれば、そのことはほとんど全員に共通である。外国の情報といっても、それは東京を仲継ぎとして入って来るものがほとんどであり、直接沖縄に入るものはめったにない。その中でも、南のアジアから来るものはとりわけ少ない。ところが東京大学に長く身をおいて、その中で研究生生活を送って来た者の一人として、東京での研究の大部分が、アメリカやヨーロッパの研究の二番煎じであることを痛感し、そこから何とかして脱却し、自分の生きている世界の現実に直面した研究を求めようとしている私にとっては、この沖縄の状況というものとは決定的にまちがっていると感ぜられる。東京や京都のあとを追うことは、二番煎じを更にも一度煎じ出すようなもので、そこから何か意味のあるものが出て来るとは思えない。沖縄の歴史を私が知る限りでも、沖縄が南を向いたとき、その文化は栄えたのであり、北に依存した沖縄には、あまりよい運命はなかったようである。

戦後の混沌たる中で島尻勝太郎先生が、古琉球の栄光を指摘し、青年に生きる希望を示したように、今日もまた、歴史にもとづき混乱の中に方向を指し示すような理論が必要な時期ではあるまいか。先生の赴報に接して、その仕事の重味のある部分は、自分の背にも加わったように感じられることがある。特に日本の公害の体験をアジアで繰り返さぬためには、先生の示された方向を歩みつづけなければならぬと思うものである。